

G.H. ミードの社会哲学 I

科学論をめぐる

小 川 英 司

はじめに

ミードは、パース (C.S. Peirce) とジェイムズ (W. James) を第一世代とすると第二世代のアメリカン・プラグマティズムの哲学者である。19世紀の末から第一次大戦を見届けた20世紀の初めに活躍した論者である。この世代にはデューイ (J. Dewey) が含まれる。というよりミードはデューイに公私にわたって世話になっていて、なおかつ生涯意見交換を絶やさず肝胆相照らす仲であった。そういうわけでミードとデューイはあつかう領域が異なっている、互いに基本的な考えに不同意はなかったと思う。その基本的な考えとは、簡潔に言えば、西洋形而上学との決別であり、アメリカ独自の思想の建設ということになる。その中身についてはおいおい論じていく (1)。

その前に記しておきたいことがある。社会諸科学とりわけ現代の経済学は、ほとんどの論者がおそらく無自覚だと思われるが功利主義 (utilitarianism) という一つの倫理学説に立脚している。功利主義について自覚的だとしてもこれが倫理学説だということに気付いている者は少ないだろう。言うまでもなく倫理学説とは「善とは何か」、ということをもっぱら問うものである。これに答えるのはキリスト教にかぎらず宗教が社会全体を大きく覆っている段階では坊主どもの専売特許であって、一般庶民のみならず知識人であっても頭を悩ましたり理念を案出するのに苦労することもないが、近世ヨーロッパに見られるように徐々に宗教の力が弱まってくると坊主どもの口舌とは違うところから理屈を見つけてなくてはならなくなる。これにいち早く答えをだしたのがイギリスのベンサム (J. Bentham) である。

坊主の権威が失墜して、世俗の知識人が「善とは何か」と問わざるをえなくなったのだ。回答は、イギリス人らしくいたって単純明快で、幸福をもたらすことである、それもできるだけ多くの人々に幸福をもたらすことである。現代の観点から見れば幸福とは何かということに答えること自体大問題だが、つまり清貧のなかで自分らしく生きるだとか、大恋愛をして理想的な相手を見つけるとか、あるいはビジネスに大成功して富と名声を手に入れるとか、さまざまな価値観を相手にして議論しなければならないが、当時のイギリスでは状況はそれほど込み入っていない。ベンサムにおける幸福は要するに財貨である。つまり、できるだけ多くの人々にできるだけ多くの富をもたらすことこそ善である、という命題に帰結する。ここから派生するのは、それではどうやって、という命題である。経済学が成立し発展するのはまさにこの命題からだ、ということが容易に理解できるだろう。

したがって、経済学はひとつの倫理学説のうえにのみ立脚しているということになって、20世紀以降その理論がどんなに発展し精緻化しても、功利主義という空間というか風船の外には一步もでることなく、いわば閉塞した空間のなかに大伽藍を構築していくような発展を示してきたのである。大方の論者は経済学は経験科学であって道德とは直接関係ないと考えているかもしれないが、研究を進めるうえでその大きな動機になっているのが、貧困の問題であったり格差の問題であったり、同じことだが不平等の問題であったりして、これは最近フランスのピケティの著作が大いに評判になったりしたことからも理解できる。それは当然であって発生段階で功利主義という倫理学説に立脚していたことの帰結なのである。

なにやら経済学に難癖をつけたような恰好になってしまったが、ここでもう一度経験科学とはいったい何かという問題に直面したい。それもより広い地平のなかで。つまり、功利主義という境界が不可視になりつつある一学説から離れて広い視野に立つことによって、その閉塞空間をいわば対象化することができるような地平を示してみたいのである。

タイトルについて述べたい。なぜミードの哲学ではなく社会哲学なのかと

いう点である。ミードの哲学は先回りして言うと最初から社会哲学なのである。というのは、ミードの体系においては社会過程（social process）が主観と客観の成立以前に前提になっているからである。人間は社会過程のなかに生れ落ち、そこで養育され成長することによって自我をそなえた人格を獲得する。つまり、社会過程の所与性が議論の出発点なのだ。

1 科学的世界像の克服

経験科学を問題にするには近代科学全体を問題にせざるをえず、近代科学全体を問題にするには科学的世界像を問題にせざるをえない。最近の科学史・科学哲学の業績によって、近代科学は自然のヴェールを一枚一枚はいでいくように単線的に発展してきた、という楽観的な見方は否定されている。トーマス・クーンの指摘をまつまでもなく、科学の進展は、ある意味革命的な変化の連続であって、決して過去の諸条件に立脚して穏やかに単線的に発展してきたものではない、ということである。しかし、科学者が立脚し、理数科教育を通じてわれわれ凡人にも浸透している科学的世界像というものの特権性は近代以降変わることなく現存している。これは近代科学そのものではなく近代科学が暗黙のうちに前提にしているひとつの世界像のことである。ひとつの世界像にとどまるだけなら問題ないのだが、この世界像が唯一的なものとして思念され前提にされることが問題なのだ。なぜ問題なのかと言えば、その背後に近代以降の二元論的な世界像が隠されているからである。周知のように20世紀以降の哲学はいわば哲学批判であって、デカルト以降定着した近代の二元論的な世界像が大きく批判的にされてきた。ミードもこの流れに属しており、自らの議論のなかで二元論的世界像の批判と克服を目指しており、ここでの議論はこれを紹介していくことになる。

以下では『現在の哲学』に含まれている論文「科学の対象と経験」(2)に即して議論を進めていく。

「認識過程 (knowledge process)」というものは、科学者と認識論者 (epistemologist) とでは異なった道筋をたどる。科学者は、自明視された物

質の世界から、すなわち自分が携わる問題のなかに現われる自明視された対象から出発する。つまり、科学者は、こうしたものから推論によって仮説を形成し、そしてそうした仮説から導かれる結論に進み、さらに仮説を検証する観察と実験に進むのである。科学者は、自らの知覚経験を批判にさらし、知覚の誤謬と歪曲を明らかにするとはいえ、そうした批判は、つねに眼前にある対象に関してだけ行われるにすぎない。つまり、科学者による批判は、自らの知覚経験を無効にすることはないのである。というのは、科学者は、自ら見つける誤りを検証する手段として、そうした知覚経験に訴えなければならぬからである。科学者が仮説を案出する過程を見れば、科学者の観念があるがままの世界における諸連関を象徴的に表わしているのが見てとれる。したがって、科学者は、暫定的に、そうした諸連関のなかから、対象とその意味との間の葛藤や事物の意味の食い違いを克服するような諸関係を見つけようとするのである。科学者は、自らの仮説構成から帰結する結論を最終的に導きだし、自明視された世界において観察と実験を行うことによって、自分が求めている確証を得たり、あるいは得られなかったりするのである。科学者の認識手続きは、知覚される世界から始まり、例外的な事例や葛藤関係にある意味などを通じて、最終的に、世界の意味が再構成された後には同じ世界に舞い戻ってくる、というように進められるのである。世界そのものを疑うことは、科学者は決してしないのである。

それにたいして、認識論者は、あらゆる知覚経験は、有機体と世界との関係に依存しているという事実から出発し、知覚が向けられる対象界からまったく分離した意識のなかに知覚表象を位置づけるために、知覚経験を幻想や錯覚として取り扱ったりすることもあるのである。こうした立場は、第二性質は、自然科学が携わる物理的世界には属しえないというルネサンス科学の原理によって、非常に強固なものになった。認識論者がとらえるような認識とは、あらゆる知覚経験を含んだ意識状態から出発し、こうした意識状態が指し示すような存在論的に分離した世界に至ろうとする試みなのである。したがって、認識論者は、認知的な指示作用があらゆる知覚経験に付着する、

という結論に導かれるのである。こうした意識状態が向けられる世界の存在が、認識論者の問題になるのである」(3)。

ここで述べられている認識論者というものがミードそのものの立場ではないと急いで指摘しなければならない。ここであげられる科学者も認識論者も近代以降の主客二元論にのった立場で、客観の方にのみウェイトをおいて、物理的に数量化できる第一性質をのみ探究の対象として、音や香りや手触りといった第二性質を排除するのが科学者の立場であり、カントの哲学で頂点にいたる主観にのみ認識の基盤をおくのがここでの認識論者の立場である。通常の哲学史の整理では主客二元論はデカルトの哲学を嚆矢とするのだが、ミードはこれをルネサンスにまで遡らせている。これもユニークな論点である。ここで仄めかされているように、ミードの主要な目的は主客分離以前の世界への回帰であり、そこで鍵となるのが行為という概念なのだが、これについてはおいおい論じていく。

見ての通り、科学者は知覚経験を抽象化、数量化することによって直接的な知覚からいったん遠ざかるが、仮説を検証する段階にいたると知覚にうったえざるをえないので知覚的世界に舞い戻ってくる。だから、科学者は世界そのものを疑うことはないのである。ところが、哲学者の場合は、科学者の場合のように眼前に知覚的世界がひろがっているのではなく、すべてをいったん意識状態に回収してしまうので、知覚的世界とは存在論的に分離した世界に立脚する。だから、「認知的な指示作用があらゆる知覚経験に付着する」という事態にいたり、主観性の絶対性にもとづく認識構図をとるのである。したがって、前者の科学者の世界は客観の方に大きくウェイトをおき、後者の哲学者の場合はそもそもすべて現実性が意識状態に還元されるので主観の側に一方的に立脚する構図となる。

「科学の対象を知覚的世界との係わりのなかに置くことは重要だが、知覚的世界は、すでに見たように、科学者がかかえる問題においてと同時に、科学者がもつ経験的データにおいても前提にされている。科学の対象は、実際に経験される対象からの抽象体であって、厳密な測定に供されるものなので

ある。さらに言えば、それは、物的事象 (physical thing) であって、概念的には操作 (manipulation) 経験の範囲内にもち込むことが可能な一定量の延長をもっているのである。われわれは、ドブロイ (de Broglie) (4) の考えにしたがって、物質を波動によって示すときでさえ、定義可能な一部分の空間に立ち返らなければならないが、そうした空間は、波動の測定を可能にするわれわれが把握可能な操作領域の枠内にあるのだ。エーテルは、科学者がその存在を認めている間は、こうした空間を充填する素材として考えることも可能であり、その際、弾性と剛性をその属性とすることも可能だったのである」(5)。

ここで物的事象と操作という概念がでてきたが、これはミードの体系において鍵になるものなので説明しておきたい。ミードにおいて行為というものが鍵になると先に述べたが、この行為は衝動 (impulse)、知覚 (perception)、操作 (manipulation)、完成 (consummation) という四つの契機をもっている。あくまで契機なので行為が四つの部分から成っていて相互に分離可能なわけではない。行為はあくまで混然一体のものであって抽象力によって四つにわけられるのだ。衝動と完成は動物の行動を例にとると分かりやすい。空腹な動物の眼前に餌となるものが現われると、それが刺激となって衝動が解発される。空腹であることが動物の衝動になる。思案することなくそこからすぐに獲物に襲いかかって空腹を満たせばそれで行為は完成する。つまり、動物の行動はおおむね衝動から完成に直結するのであって、その間の媒介過程はあっても無視してかまわない程のものだ。このふたつの契機にはさまれた知覚と操作がきわめて人間的な現象になる。

行為には目的がつねにあるが、目的になる対象の操作という契機によってただ漠然と推移しているだけの世界が特定の分節化をこうむり、ここに時間と空間が分離して物が物として、すなわち物的事象として存在するようになる(6)。知覚の局面というのは、このような操作から完成にいたる行為経過のすべてを仮構的にそのなかにふくんでいるのである。したがって、知覚のなかには先取的に行われる仮構的な行為の全経過が縮刷された形でふくま

れているのだ。だから純粋な知覚などはない。対象にたいする知覚はすべて仮説的に行われる行為なのである。

科学の世界の展開にはこの操作領域が鍵となる。行為の四つの契機である操作が発展、肥大化していったのが科学の発展だと言ってもいいくらいである。「操作領域の空間構造は、不可入体のそれであり、物理的な検証が可能である場合、ユークリッド幾何学の空間構造と同じである。とりわけ重要なのは、こうした操作領域のなかにおいてこそ、われわれは、直接的にあるいは間接的にわれわれに共通な対象を見いだすということである。たとえば、認識論者が一個の銅貨にたいそう執心していたとしよう。けれども、銅貨は、さまざまな角度からあるいはさまざまな距離から観察する者にとってどれも同じ銅貨である。それは、こうしてさまざまに見られる銅貨が、同じひとつの銅貨の現われとして、すなわち観察者の誰もが、自らの視覚経験を操作することにおいて、手を触れたり握ったりすることができる同じひとつの銅貨の現われとして認識される限りそうなのである。したがって、操作、測定、位置づけの方法が共通している結果として、さまざまな観察者の操作領域は同一のものになる。次のことを認識することは重要である。すなわち、個々人は、自分だけに特有な意味において、銅貨から圧力の経験を受けとるだろうが、誰もが経験する銅貨を認定する方法は、彼自身に特有なものではない。それは、論理的な手続きであって、その独自性と関係性が存在するのは、それらが個人の経験において普遍的な要因をかたちづくる限りなのである」(7)。

ユークリッド幾何学の空間は、われわれ通常人の常識的な空間認識とはほぼ変わらないので、ミードは操作領域の空間構造と同じだと言っているのである。この常識的な空間のなかにおける操作領域において、われわれは共通の対象、共有化された対象というものを獲得する。一個の銅貨は、見る人、触る人の位置次第で厳密に言うと千差万別であるはずだ。カント以降の主観性の哲学では、すべての認識を主観性のなかに回収してしまうので銅貨は千差万別であるどころか銅貨自体に到達することも不可能だ。ミードはそれを否

定する。人間の行為には操作領域というものがあって、そのなかで同じひとつの銅貨として共有され共通に対象化されるのである。手続き的な面で言うと、操作、測定、位置づけという物を認識するうえでの手続きが共有化されていることによって、観察者誰もが共通の操作領域をもつようになり、同じものが同じものとして同定されるのである。だから、あるものをあるものとして同定するのは認識論的主観性などといったものではなく、誰もが同一の操作領域をもつことによって可能になるのだ。

「したがって、われわれは、われわれの行動の基本的な秩序をさかさまにしてしまったのであり、『事物の本質』を接触経験とする代わりに離隔経験としてしまったのである。こうした行き違いが生じた理由は明らかである。操作領域のなかの対象は、個人のパースペクティブに属しているが、そうであるのは、こうした操作領域が、個人が属する共同体の各成員に共通な測定方法によって、したがって、個人有機体が物的事象としてそのなかに属する布置関係がもつ時間空間に共通な測定方法によって確定されうる限りで可能になるのである。離隔した布置関係のなかにある対象が被る歪みは、離隔した視点から見れば、われわれ自身の布置関係が被る歪みと同じである、ということを理解するのは、離隔した布置関係のなかにわれわれ自身が身を置くことによってのみ可能になるのである」(9)。

科学論を論じるのにどうして共同体がでてくるのか、読者は驚きのことだろう。ミードにおいては、これは驚きでもなんでもなく、人間の現実性の確定のされ方があらゆる現実性の土台になるからである。だから、「事物の本質」は接触経験なのだ。接触経験とは、自我の生成の土台となる他者の役割取得が物質界にも及ばされ、物の役割取得といったことに及んで対象の世界が経験されるメカニズムにおいて鍵となるものである。物に圧力をかけたときに押し返してくる経験によって物の内部に知覚が及んで物の役割取得が行われる。幼児の段階で繰り返されるこうした経験の積み重ねが、人間の現実性の土台になっているのだ。ミードの哲学は、近代以降の哲学が視覚の哲学だとすれば、接触の哲学だと言える。先ほど操作について述べたが、手によ

る物の操作というものが、あらゆる人間的現実性の土台であり、近代のみならずあらゆる文明的所産の土台だと言ってもいい。

このように人間の現実性は接触経験にもとづいているが、現実の世界はほぼすべて離隔対象によってかたちづけられている。物や測定対象は、個々人のパースペクティブのなかにあるが、観念論哲学ではこれのみが唯一の現実だとされるが、誰もが同じものを同じものとして同定したり、同じ測定結果として確認したりするためには、共通の尺度の存在が前提になる。この共通の尺度を提供するのが個々人が属する共同体なのである。日常生活においてこのことの理解は容易だが、科学の世界においても科学者共同体というものがあって、これが同じものを同じものとして確定する。人間の集団を離れた客観的な真理などというものは存在しないので、科学者共同体が真理だと認定したものが暫定的に真理になるのである。この科学者共同体の土台には日常的な世界の共同体とそこにおける現実性の生成があるはずなのだが、相対論以降の物理学においてこうした土台の存在が忘れ去られ無視されていく、というのがミードの問題意識なのだが、これはおいおい見ていく。

「したがって、われわれに残されるのは、遠くに見える光の信号という言葉であるが、これはあらゆる者の経験に共通な対象を指示することはできない。もちろん、さまざまな定式を適応することによって、ミンコフスキー時空において同時進行する出来事間に一定の数値を当てはめることはできるし、この一定の数値を、さまざまなパースペクティブの見地から行われるあらゆる測定が究極的に通約される共通の現実だと見なすことも可能である。けれども、ミンコフスキー時空は、離隔経験が備えるあらゆる特徴を抽象したものであるが、そもそも離隔経験の意味は、万人共通な物的対象への通約可能性にあるのだ。離隔経験が備えたこうした特徴だけが、さまざまに異なったあらゆるパースペクティブに共通な単一の計算法に通約されるものとして残されるのである。こうした抽象化こそ、第四の次元として時間を空間に帰属させることを可能にするのである。こうした計算法にとって、ひとつのパースペクティブにおける時間幅は、別のパースペクティブにおいて空間

幅になるのである。けれども、われわれは、こうして、われわれがもつシンボルが、共通な指示対象への指示という意味作用以外にはどんな意味作用もしないコミュニケーションの領域に立ち至ってしまった、と考えるのは誤りだろう。実際、われわれは、依然として、光速以下の有限な数値をともなった視覚的な世界のなかにいるのである。すなわち、無限に多様な視覚経験に共通な計算値によって示されるのは、こうした視覚経験が向けられる物的事象だけなのである」(10)。

ミンコフスキー時空とは、アインシュタインの特殊相対性理論の四次元時空を非ユークリッド幾何学で表現したもののだが、ここまでくると抽象化が徹底して時間まで空間化されてしまい、現実性の根幹となる離隔経験が成立しなくなる。ミードの議論においては、時間は決定的に重要な次元であって、いままで存在しなかった新たなものが既存のものから創発(emergence)する土台となるものだ。ミードの世界においては通常は経過するだけのあるがままの世界のなかに何か問題が生じると、人々の行為が活発化していままで存在しなかった新規なものがすでに存在しているもののなかから創発して、問題の解決が次々と進んで新たな世界が生じてくるのである。したがって、時間は決定的な次元である。ところが、ミンコフスキー時空においては、変化のもととなる時間さえも空間化されて第四の次元とされるのだ。ここでは変化は生じえない。なぜなら時間が空間化されているからだ。永遠の現在が永遠に続くのみだ。神の視点だけが残る。離隔経験が成立しないと、万人共通の対象が存立しえない。なぜなら、離隔経験こそさまざまに異なったパースペクティブにたいして通約可能な尺度をもたらすからである。

「エネルギーが物的事象の本質をかたちづくっているという考え方にも、同じような批判を加えることができる。知覚的世界にとっては、事物のシステムが存在していなければならず、したがってエネルギーは、外部から力を加えられたときに、このシステムにもち込まれる変化を測定する手段なのである。けれども、実験や熱力学が実験結果に与えた数理的定式化は、こうした測定手段が、システム内の位置エネルギーしか示さないという結論を正当

化してきた。ポワンカレ (11) が指摘したように、われわれは、つねに、エネルギー恒在の原理を無傷のままにして、位置エネルギーを前提にすることができるとはいえ、エネルギー恒在の一般式の普及に関して、われわれがどれだけ説得されてきたかが議論の争点になっている。けれども、もしわれわれがこうした位置エネルギーを事物の本性と考えるなら、時間と空間を時空に置き換える場合と同じように、かならず知覚的世界を等閑視してしまうことになるのである」(12)。

このように、ここでも知覚的世界の第一次性が主張されている。ミードにおける知覚的世界は物的事象に満たされていて、これが人間的現実性をかたちづくっているのだが、これをすべてエネルギーに還元してしまうことは、時間と空間を時空に還元してしまうのと同じように、人間的現実性そのものである知覚的世界を等閑視することなのだ。ここで物理学に妥協した言い方をしているが、「事物のシステム」とは物的事象の世界であり、エネルギーとはこれに力が加わったときに起こされる変化を測る手段にすぎないのである。ミードはこのようにエネルギーそのものより変化に焦点を合わせるが、これらも位置エネルギーというものに還元されてしまう。これを事物の本質などと考えることは到底できない。事物の本質は、あくまで、接触経験から始まり離隔対象を獲得して得られる事物の世界、すなわち人間の知覚的世界に他ならないからである。さらに続く。

「時空と同じように、エネルギーは変化する値である。われわれは、行われた仕事を振り返って、操作領域において、エネルギーの測定手段としてある過程を選びだす。けれども、測定されるものは物質の質量の関数として示されず、反対に質量そのものがエネルギーによって示される。したがって、われわれは、物的事象を時空やエネルギーに還元するとき、どちらの場合にも、物的事象の本性を明らかにするために、知覚領域や操作領域における測定過程を利用しているのであるが、その一方、物的事象のものとされる本性は、測定領域には属さないことになるのである。前者の場合には、われわれは、事物の代わりに、経験と係わりない時空に座を占める出来事を設定して

いるのであり、後者の場合は、オストヴァルト（13）の見解に見られるように、同じように経験とは疎遠な形而上学的な領域に訴えているのである」（14）。

先ほどは時間空間の時空への還元を見て、それにたいするミードの批判を見たのだが、ここではエネルギー一元論が批判の俎上にのっている。前者の場合というのは、この時間空間の時空への還元を指しており、そうすることで経験と係わりのない出来事というプラグマティストには到底受け入れられない対象が設定されている、というのが批判の内容である。後者の場合というのは、物的事象のエネルギーへの還元を指しており、これもまた経験とは無縁な対象を設定している、という批判である。このエネルギー一元論は形而上学だとさえ断じられている。ミードを含めたプラグマティストというのは、形而上学的カテゴリーを徹底的に排除して、経験にもとづいた独自の世界観を構築して西洋形而上学の伝統から決別するのが最大の目的であるので、たとえ物理学の領域においてもエネルギー一元論のような形而上学的発想には厳しく反発するのである。もともと経験科学であるはずの物理学が経験とは無縁な形而上学的カテゴリーを設定するなど言語道断だ、というわけだ。けれども、現代物理学の成果も受け入れなければならない。

「私はなにも、ホワイトヘッドがニュートン時代の唯物論と呼んだ御馳走に引き寄せられているわけではない。そうした考え方は、ホワイトヘッドが慨嘆した二元論という重荷を背負っているのであり、ラブジョイ（15）がわれわれの前に広範に展開した認識論的諸問題という巣窟をすべて隠蔽してしまうのである。私が主張したいのは次のことだけである。すなわち、電磁気学が研究と原理の点で支配的になり始めて以来、科学によってもたらされた重要な変化にたいして、われわれがどのような考え方をとるとしても、われわれは知覚による発見から遠ざかることはできないし、あらゆる科学もそうした発見を最も基本的な現実性の規準として受け入れているのである。科学が自らの規準として、知覚による発見に訴えることは、確かに、どんな場合にも接触経験によって離隔経験を単に確証すること以上のものを含んでい

る。むしろ、そうした訴えかけは、仮説を確証する目的で、仮説にもとづいて予測される出来事が、知覚のうでで生じることに向けられている。操作領域における知覚的に現実的な事物の重要性が生じるのは、この種の対象が、例外的な事例における観察と実験によって同定されうる場合である。たとえば、黒い物体の輻射を考えてみよう。これは、対象の現実性が知覚的事物として受け入れられなければならないものだが、こうした対象にたいして、後に仮説を生じさせるかもしれないどんな解釈にも先立ってそうしてみよう。そうすると、われわれは、視覚的に感覚可能な対象として自らを維持するものに到達することになる。さらに明らかなことは、測定手段、すなわち測定尺の信頼性は、この同じ知覚領域のなかで保証されなければならない点である。われわれは、知覚の領域の時間と空間からニュートンの原理にもとづいたユークリッド空間に広がっていくことはできないし、知覚的事物をニュートンの物理粒子に分割することもできないが、たとえそうであっても、われわれは、何らかの仕方で、知覚経験の境界を越えた世界のみせかけの現実性を、科学者の発見による決定論的な現実性に関係づけるのである」(16)。

ニュートンの体系がくずれて電磁気学が物理学の主流になっている段階においても、知覚による発見から遠ざかることはできないのである。地球を平気で貫通するとされるニュートリノのような物質であっても、その観測は複雑巨大な装置によったとしても最終的には乾板やらなにやらに映ったその物質の軌跡として知覚されるのである。だから実際の科学的実践は知覚的経験にもとづいて行われているのだが、時間を空間化したり物質をすべてエネルギーに還元したりして、これこそが世界の本質だと強弁することが科学的の世界像の弊害なのである。だって科学は実際に知覚から離れられないのに、知覚とは無縁な時空やエネルギーの方に第一次性をおくのは本末転倒である。目には絶対に見えないニュートリノを目に見えるかたちにするのが科学的実践なのである。そして、目に見える形になったものが現実性の土台であり、目に見えるからニュートリノは存在するという確認にいたるのである。

「ニュートンの機械論的な体系が崩壊したのは、熱力学の法則と電磁気理

論の発展とともに、われわれの知覚経験に適合する物的事象の意味が、もはや、いわゆる物質的な宇宙に適用できなくなったからである。われわれは、いまや、厳密に規定された離隔経験が出現したこと、これは何らかのものが、あくまで何らかのものにすぎないのだが、進行していることに対応し、操作事象の間の変化によって示されえないこと、こうしたことに直面している。実際、われわれは、いまや、初期の離隔経験によって示される事物の内的性質として、エネルギーや輻射といったそれ以外の離隔経験を、さまざまな物理的仮説において定式化しているのである。他方、われわれは、気体の圧力を説明する際には、物質粒子が容器の壁やお互いどうしがぶつかり合う姿を思い浮かべて納得する。こういう場合、究極的な要素は、知覚上の言葉で把握される物的事象なのである。けれども、電子や陽子の内容を、輻射というかたちで生じるエネルギーとして語る場合、われわれは、それらをもうひとつ別の離隔経験によって描きだしているのである。さらに言えば、そうした離隔経験は、把握不可能な接触経験を指し示すこともできるのである。けれども、だからといって、われわれは、科学の概念的な対象を扱っているということで、知覚経験の全体を片隅に追いやることはできない。というのは、われわれにとっての問題、それにわれわれが行う観察と実験、このどちらも知覚経験によって示されるからである」(17)。

人間の現実性をかたちづくる知覚的世界と当時の現代物理学が提示するものが乖離して別の物質的宇宙に対処しなければならなくなった事情が述べられている。ニュートンの機械論的な体系は崩壊してしまったので、ミードの側でも新たに知覚の現実性と科学との折り合いをつけねばならないのだ。ニュートン力学の世界はまだ素朴であるので知覚的世界と親和的であったのだが、電磁気学の発展がこの幸運な関係を崩したのである。エネルギーや輻射といったものに対応しなければならない。これら慣れ親しんだものとは違った離隔経験というものを定式化しなければならないのだ。しかし、新しい概念の世界を扱うにしても知覚的世界の不可欠性は何ら影響をうけない。なぜなら、科学において行われる観察と実験は知覚経験によって示されるか

らである。こうした事情は次の文章でより詳細に示されている。

「科学者は、ニュートン力学の世界のなかに安住していられた間は、つまり原子が電気的な粒子に分割される以前は、デュ・ボア・レーモンばりの遠目の利く目を使って、事物の中身を通り過ぎて、比較的単純な法則にしたがって運動する究極的な粒子を見ることができた。科学の対象と知覚の対象との繋がり、観察と実験が行われる世界が、科学の対象の世界と同じだと科学者に感じさせるほど密接だった。いわゆる感覚の質が、それが第一性質だろうと第二性質だろうと、対象の実際の性質ではありえなかったというのは本当である。けれども、科学がもとづくユークリッド空間と知覚される空間との一致関係は適切なものであり、重量と質量との相関関係も完全だったので、感覚的に知覚されたものを想像によって細分化することは、そのときはまだ物理学の分析と並行関係にあった。科学者は、もちろん、物質について考察するかぎり、第二性質をすべて意識のなかに位置づけざるをえなかった。なぜなら、機械的な宇宙は、単に運動する物質粒子とエーテルの波からつくりあげられていたからである。物理的な世界のなかでは、色、音、味、臭い、温度といったものに対応するのは、さまざまなタイプの振動だった。もし科学者が一貫した態度を貫いていたなら、事物の抵抗も同じように意識に帰属させなければならなかったわけだが、そうはならなかった。けれども、実際には、科学者が、自然のなかで進行していることを知覚的に想起することによって、物質粒子の機械論的なモデルをつくりあげるのに何の障害もなかった。ケルビン卿こそ、熱力学と電磁気学に折り合いをつけなければならなかったこの時期の科学者の典型例である。同時に、この時期はまだ、宇宙を解明しようとする際に、エーテルの渦巻運動と圧力とによって、知覚的な想起で十分間に合うような機械論的な描像を描こうとしていたのである。ミリカンの油滴や、ラザフォードのアルファ粒子による原子の衝突写真、あるいはボーアの原子モデルなどは、極微小の世界の星雲を宇宙空間に実際にある星雲に引きつけて考えていたようだ。圧力を加えたり抵抗したりする事物を、計算可能な速度をもったものとして、宇宙のなかに位置づけることがで

きたときまでは、科学的な想像力は、知覚の世界と密接な関係にあったのである」(18)。

究極的な粒子、すなわち原子はもちろん目に見えないが、古い物理学の世界においては、知覚の世界からの類推によってそうした粒子の様子を思い描くことができた。ニュートンの体系は知覚の世界からさほど遠ざかっていない素朴なものであったので、人間的現実をかたちづくる知覚の世界とはそれほど齟齬をきたさなかったのだ。だから、新しい物理学でも観察と実験は知覚の世界で行われるが、それらが立証しようとする概念は高度に抽象化されたものであるのにたいして、古い体系においては、観察と実験が行われる世界がそれそのまま科学の対象と同じものだと考えられていたのである。古典力学が立脚するユークリッド空間はそれこそ常識的な空間であって、知覚的世界と同じ空間かあるいはその延長としてとらえられていたのである。重さと質量も常識をまったく裏切らずに完全に相関関係にあった。だから感覚的に知覚される物質を想像力によって際限なく分割していけば原子にたどりつけると考えられたし、実際そういうかたちで思念された。ここで第二性質についてふれなければならない。これは科学があつかう定量的な対象化になじまないものなので、ミードによればルネサンス以降、科学的分析の対象からはずされてすべて意識のなかに押し込められてきたのである。感覚的、主観的なものは意識という便利なごみ箱のなかに放り込まれたのだ。ミードは、これら第二性質を人間的世界の構築において重要な要素として復権させたいのである。それはさておき、見てのとおり、古典力学の世界においてもこれら第二性質はすべて意識のなかに位置づけられていた。なぜなら、物理学において世界は運動する粒子とエーテル(19)の波からできているからだ。色や音、味や臭いといった第二性質もたんなる振動に還元された。なぜなら、さまざまな振動に還元すればこれらのものもかろうじて数量化できるからだ。上の文章で示されていることは、結局、科学者の想像力は、知覚的世界と繋がりをもったままというか、知覚的世界に準拠して物理的世界を描写してきた、ということであり、それが可能だったのである。もう一度離隔経験

に立ち返った議論を見ておこう。

「問題には二つの面がある。私の考えでは、離隔経験という場合次のことが含意され、また含意されなければならない点を認めなければならない。すなわち、有機体が離隔経験の原因となる過程が進行している場に存在し、なおかつ適切な感覚器官を備えていなら、『眼前に』進行していることが接触経験の原因になるだろうということである。問題のもうひとつの面は、われわれは対象の性質をなぜこうした語り方ではなく、離隔経験によって示すのかということである。私の考えでは、こうしたことの理由は、科学者は、永遠不滅なものを探究し、こうしたものをさまざまな過程の斉一性のなかに見いだすこと、そしてこうした斉一性によって科学者は自らの対象を定義すること、したがって、まさにこうしたことこそ科学者が概念的な対象について語るときに意味されていることなのだ、ということにあるのだ。したがって、科学者は、知覚領域を超越してしまったように見える。科学者は、もはや、離隔経験も接触経験もあつかわず、組織化された変化のシステムをあつかっているようだ。けれども、このシステムは、離隔経験と接触経験のどちらかのカテゴリーのなかに自らを映しだすにもかかわらず、こうした経験とはまったく無関係なのである。したがって、あと一步で、知覚表象論に陥ってしまうのである。対象の知覚内容は、感覚与件によって定義されるようになってしまうが、これは科学の対象と相関関係にあるとはいえ、意識のなかに自らに適した場を占めるか、あるいは精神と自然の間のどこかに場を占めることになってしまうのである (21)」。

プラグマティストは realist なので絶対に知覚表象論は受け入れない。ましてや科学者が想定するような idealism など到底受けつけないのである。なにも科学者が自覚的に観念論を展開しているわけではなく、永遠不変なものを絶対視してさまざまなカテゴリーを打ち立てるのでそうになってしまうのである。上の引用で示されているように、科学者はまず永遠不滅なものを立て、これを演繹的に展開してさまざまな過程のなかにみられる斉一性に適用する。そしてその斉一性によって自らあつかっている対象を定義する。出発

点が永遠不滅なものでそれと齟齬をきたさないものだけを対象として定義するので、なにからなにまで永遠不滅なもので満たされてしまう。ここには本質的な変化というのは現れないし、新奇性が生じる余地もない。自然が対象なのだからすべてが永遠不滅であってもいいではないか、という考え方もあるが、そうなると人間の現実性が形成される知覚的世界というもの等閑視され、抽象化され変化しない形而上学的カテゴリーの独壇場となってしまうのである。また、こうして定義された概念は接触経験とも離隔経験とも無縁になるので、知覚的世界とも無縁になりそうなのだが、かろうじて対象の知覚内容を感じ覚与件として定義するのでなんとか知覚との関係をたもっている。しかし、この感覚与件というものが曲者で、哲学上の意識内容という概念と区別できなくなる。カント哲学のようにあらゆる知覚を意識のなかに回収してしまう立場と区別できなくなる。これは物理学の観念論化とも言える。先の方で述べたが、ミードは自然科学的世界像だけではなく、ドイツ観念論流のすべてを意識のなかに回収してしまう主観性の哲学も拒否する。最先端の科学の世界で意識の哲学のような概念規定がでてくるのは奇妙な光景であると同時に皮肉な事態である。

「科学者が、意識や感覚与件によって、こうした意識領域を用いない理由はふたつある。ひとつは、科学者の観察や実験において外在している世界は、現実の世界だからである。感覚与件と科学者にとって現実的なものとの間に、うまく線引きを行うことはできない。こうした事実がとりわけ明確になるのは、われわれが事物の意味と呼ぶものを考察するときである。こうしたものは、意識と呼ばざるをえないものと絶望的にからみ合っている。けれども、事物の意味こそ、まさに科学の対象の性質なのである。もうひとつの理由は、いまやいわゆる意識は、生物学の領域のなかにもち込まれていることである。精神は、もはや自然の外部に置くことはできないのである」(21)。

意識や感覚与件は、哲学的につきつめると主観性のなかに完全に回収されてしまう危険性がある。というのは、どちらも知覚としてとらえられるが意識内容に還元される可能性があるからだ。だが、科学者は意識領域には深入

りしない。なぜなら、科学者が観察や実験を行う場合は、現実の世界、すなわち人としての科学者が接触経験から離隔経験にいたり人間的現実性の土台である知覚的世界のなかに住んでいるからである。もちろん、科学者はこうした人間的現実性などというものは自覚していないのだが、現実の世界のなかで観察と実験を行っている、ということに疑いをもたない。ただこうした科学者の現実と感覚与件との間を厳密に区別するのは困難だ、とミードは述べている。科学者は事物の意味を、当然のように探っているわけだが、事物の意味と意識とは、ミードは絶望的とまで言っているが、深くからまり合っていて、今述べたように意識のなかに回収されてしまう危険がある。しかし、科学者は実際には観察と実験という現実的な知覚的世界に錨をおろしているので実際にはそうならないのである。

続く

註

- (1) いまでは考えられないが、19世紀末のアメリカというのは、まだまだ辺境の一国であって、とりわけ学問芸術の分野では後進国といってもいいような状態であった。したがって、向学心の強い青年たち、とくに哲学に関心をもつ者はおおむねドイツに留学した。ミードもその例にもれず短期間とはいえドイツに留学しヴィンデルバントに師事している。フランスのジャック・デリダなどが典型だが、まだ文体の確立できていない若い時に遮二無二ドイツ語を読むと変な母国語を書くようになってしまう。ミードもその例にもれずひどい英語であって、筆者のような外国人だけでなく同国人にも苦勞をかけているようだ。デューイは名文家であるがゆえか、後世に大きな影響をのこし、いまでもその全集はどこにもあるが、ミードの場合はそうになっていないのはその文章のせいかもしれない。
- (2) G.H.Mead, "Scientific Objects and Experience" in *The Philosophy of*

the Present, 1932, The University of Chicago Press.

- (3) *ibid.* pp. 140-41.
- (4) Louis Victor de Broglie フランスの物理学者。粒子の粒子性と波動性とを融合させ、シュレディンガーの波動力学の先駆となった。
- (5) Mead, *ibid.* 141.
- (6) *ibid.* p. 141.
- (7) この物的事象については場所を改めて詳細に論じる。
- (8) Mead, *ibid.* p. 142.
- (9) *ibid.* pp. 144-5.
- (10) *ibid.* pp. 145-6.
- (11) Henri Jules Poincare.
- (12) Mead, *ibid.* p. 146.
- (13) Wilhelm Ostwald. エネルギーによる一元論的世界観を打ち立てた。物理的なものも心的なものもすべてエネルギーの量的不滅と質的变化によって説明された。
- (14) Mead, pp. 146-7.
- (15) ミードが挙げているラブジョイの文献は、*The Revolt Against Dualism*
- (16) Mead, *ibid.* pp. 148-9.
- (17) *ibid.* pp. 150-1.
- (18) *ibid.* pp. 153-4.
- (19) このエーテルというのは、かつては宇宙を満たす媒質だと想定され、これによっていろいろなものが振動として伝えられると考えられていたが、現在はその存在は否定されている。
- (20) Mead, *ibid.* pp. 151-2.
- (21) *ibid.* p. 152.